

ウツナイチャシについて

金盛典夫・松田 功・藪中剛二・阿部公男

099-41 北海道斜里郡斜里町本町 斜里町立知床博物館

はじめに

本チャシは昭和61年夏、筆者の一人である松田が地表性甲虫の調査のため、付近一体を踏査中に発見したものである。

同年10月25日、金盛らは以久科北区および美咲地先の海岸保安林内の遺跡分布調査を行った際に同チャシを再確認した。

その結果、従来知られているチャシとは立地の点で若干相違が認められ、さらには知里真志保によって採録されたシレットコウンクルのチャシである可能性も考えられるため、ここに報告することにした。

なお、ウツナイチャシとは後述する地名のウツナイルエサンにちなんだものであるが、ウツナイとは、斜里川の一枝流であったウエンベツからさらに枝別れてトーツル沼に突き抜けて行く小流をさしてウツ（脇骨）ナイ（川）と呼ばれていたのに由来する。

また、この地点はかつて発掘調査の行われた宇津内遺跡のちょうど北側にあたり、斜里側右岸の砂丘列中で最も幅が広く、汀線から南側の低平地に至る距離はおよそ700メートルである。

立地

このチャシは、斜里市街より西方約4キロメートルの砂丘上にある。砂丘は網走市北浜から斜里町峰浜まで、およそ35キロメートルほど続き、もっとも古い砂丘は縄文海進の頃の生成と思われるが、現在は既に安定期にはいっており、ミズナラ、カシワを優先種としてイタヤカエデ、ハリギリ、ハルニレ等の卓越する広葉樹林帯である。チャシはこの旧砂丘の北縁に位置する（図1）。

新砂丘に相当する図に示した鉄道の北側はイタヤカエデ、エゾノコリンゴ、ハマナス等の中低木が見られるほかは樹木類は少なく、ハマニンニクを主体とした草原地帯となって海浜地へ続いてい

る。

また、チャシのある旧砂丘の特徴の一つとして非常に起伏が激しい点があげられる。最も低い所では標高3メートル、高い所では30メートルを越える。

チャシはその中の二本の溝状の窪地に挟まれた東西に延びる標高16メートルの砂丘上にある。舌状丘部の北側の傾斜はきつく南側はこれよりもやや緩い。

形態

標高16メートルの地点で南北に走る溝は20メートルの長さでL字型におれ、西に35メートル伸びたところで途絶えている。舌状丘部の先端部を切るようにもう一本の溝が南北に掘られている。東側の溝の長さは13メートルである。したがって、長軸55メートル、短軸20メートルの長方形を呈する大型のチャシである（図2）。

また、溝のもっとも深い部分は180センチメートルを越え、最大幅は4メートルである。

ここで注意しなければならないことは、通常チャシは海・川・湖・平野のいずれかを臨む丘陵上に位置するのであるが、このチャシの場合、海浜地まで300メートル程度であるが、その中間に同じく東西に延びる14メートル級の砂丘列があり、海への視界をさえぎっているのである。

したがって、すくなくとも海を見通す位置にあるとはいいがたい。また、付近には一本の川もなく、平野を臨む位置でもない。わずかに、南北の両側に疑似河川ともいべき細長い窪みはあるものの、これは砂丘の生成時に生じた凹凸の一部であって（おそらく新砂丘と旧砂丘との境目）、かつて川が流れていたものではない。いってみれば極めて視界の悪い林中の凸部に構築されたチャシということがのできるのである。

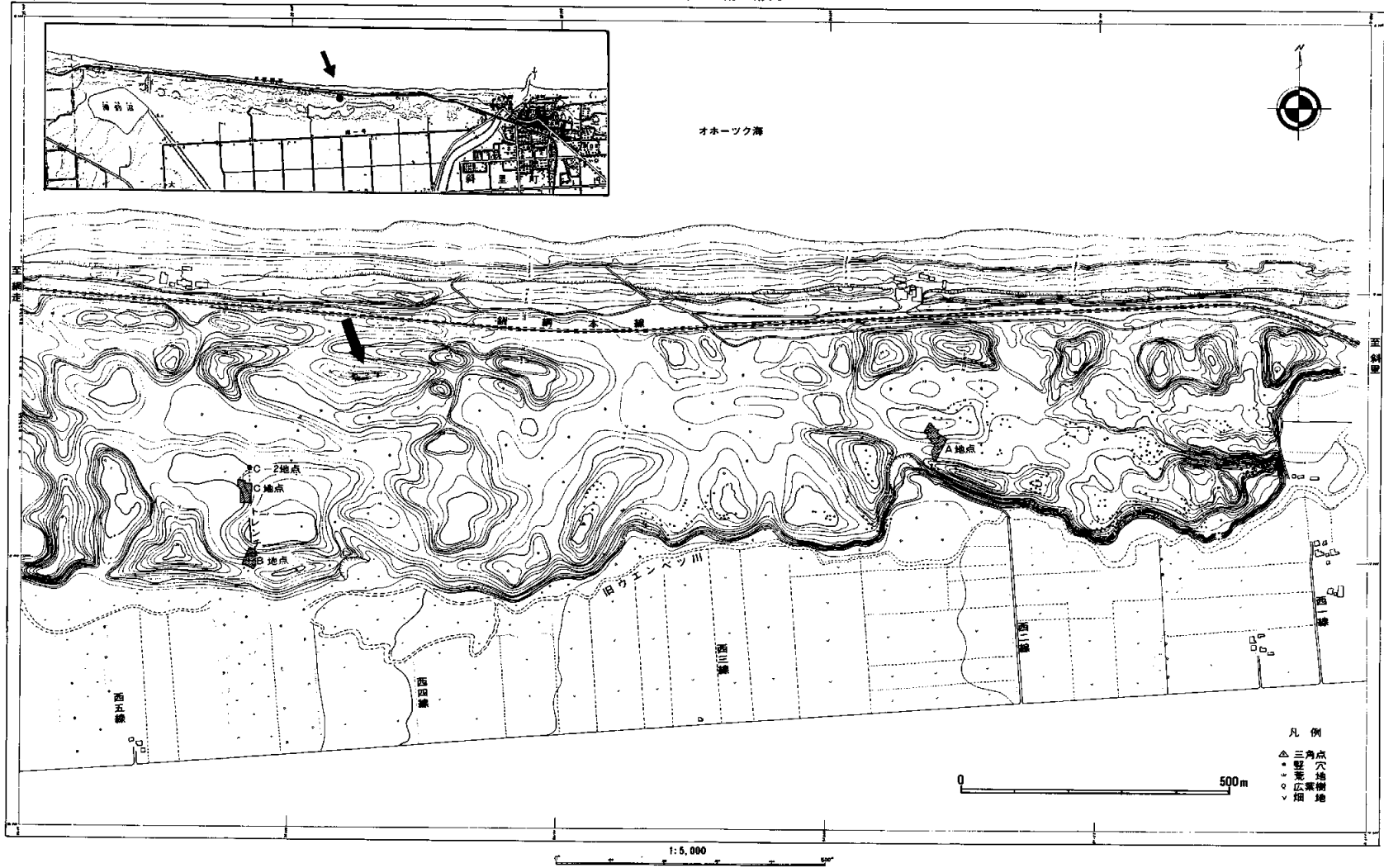


図1. ウツナイチャシ位置図（「宇津内遺跡」より）

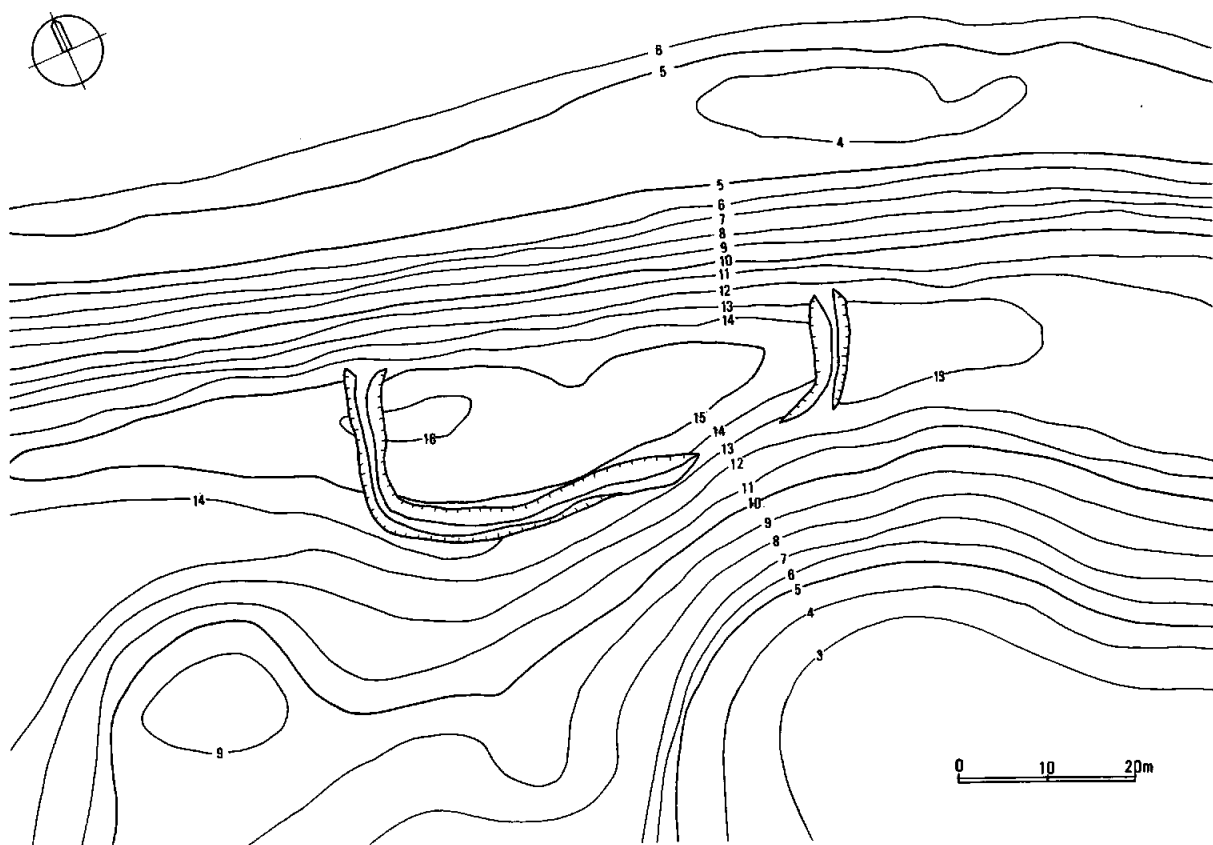


図2. ウツナイチャシ実測図

伝承

知里真志保（知里：1955）によれば、菊地儀之助翁の話として、かつてトーツル沼のそばにコタン（トコタン：江戸時代のほとんどの紀行文に登場するが、このころすでに廃村になっていたらしい）があり、そこにシレトコウクルのチャシがあったと記録している（知里：1955）。

筆者らはまだトーツル沼周辺でこのチャシを確認していないが、あるいは我々がウツナイチャシとしたものがそれであるのかもしれない。しかし、トーツル沼と現在地とはおよそ4キロメートルの距離があるため、ただちに断定しがたい面もある。

このことについてはさらにトーツル沼周辺を精査することによって結論を得たい。

地名との関係

以上のように、このチャシに直接関係する伝承

及び記録は現在のところ得られていないため、どのコタンとの関わりを持っていたチャシなのか、また、その利用形態は如何なるものであったか、そしていつごろのものであったかということについては不明であるが、この利用に何等かの関係があると思われるものに地名がある。

明治30年の陸測図1/5万によれば、ちょうどこの位置にウツナイルエサンという地名がある。ウツナイルエサンとは海岸から砂丘を越えて「ウツナイに降りていくところ」と解釈できるのであるが、このことはある時代に交通路として利用されていたと考えることができる。

さて、ウツナイルエサンの出てくる文献としては次のものがある。「東西蝦夷山川地理取調図」（松浦武二郎：1859）、北海道蝦夷語地名解（永田方正：1927）、仮製5万分1地形図（参謀本部陸地測量部：1897）、斜里郡内アイヌ語地名解（知

里真志保(1955)がある。このほかウ(フ)ツナイとだけあるものとしては公務日記(村垣淡路守:1854)、竹四郎廻浦日記(松浦武四郎:1857)、東徼私筆(成石修:1857)があるが、この3件は川の名前とみた方がよいと思われる。

したがって、初出は松浦武四郎によるものであると思われるが、このころすでに海岸から内陸に向かう道は、およそ1.5キロメートルほど斜里側に寄ったニナルエサンがとられている。

つまり、すくなくとも安政年間には交通路としては用いられていなかった可能性がある。

遺跡との関係

この砂丘上で発掘された遺跡には「宇津内遺跡」がある(米村他:1973)。

発掘されたのは全体のごく一部であるが、さらにA・Bのふたつの地点にわかれて発掘され、そのうちのA地点から縄文晩期、続縄文期の遺物のほか、一点ではあるがアイヌ期の内耳鉄鍋が出土している。宇田川(宇田川:1985)によれば「送り場」であろうという。

そうだとすれば、ただちにここをコタンの跡であるとはいきれないが、すくなくともこの近くにコタンが存在していたと考えることができる。

しかし、この場合もチャシとの距離は約1キロメートルあり、直接的な関係については不明である。

まとめ

以上をまとめると次のようになろう。このチャシは見通しの悪い林中に作られたものである。また、交通の要所に作られたものであるらしい。そして廃棄の年代は安政年間をくだらないと考えて間違いないが、構築年代については火山灰(Me-a、Ma-b5)の堆積状況を確認していないため明らかでない。

末筆ながら、チャシとコタンおよび送り場の距離的關係について宇田川洋氏に御教示をいただいた。御礼を申し上げたい。

文 献

- 宇田川洋(1985):アイヌ文化期の送り場遺跡。
考古学雑誌、P.37~38、日本考古学会。
参謀本部陸地測量部(1890):仮製5万分1地形図 斜里。

- 知里真志保(1955):斜里郡内アイヌ語地名解、斜里町史、P.857、斜里町。
永田方正(1927):北海道蝦夷語地名解第4版、P.488、(復)国書刊行会、1972。
成石修(1857):東徼私筆、P.171、大野良子訳政界往来社、1978。
松浦武四郎a(1859):東西蝦夷山川地理取調図、北海道大学北方資料室蔵。
 b(1857):武四郎廻浦日記(下)p.390。
高倉新一郎解説、北海道出版企画センター、1978。
村垣淡路守(1854):公務日記、更科源蔵訳、古文献にあらわれた斜里、P.808、斜里町史、1955、斜里町。
米村哲英・金盛典夫(1973):宇津内遺跡、P.28、斜里町教育委員会。
筆者不明(1792~3):西蝦夷地分間、函館図書館蔵。